

## シャーマニズムを依存症治療に接合する — ペルーアマゾンの「歌う家」、 薬物依存リハビリセンター「タキワシ」訪問記

Amazonian Shamanic Techniques Appropriated For Healing Drug Addictis  
— A Visiting Story to "Takiwasi" in Peru, Center for Drug Addiction Treatment.

山 本 誠  
Makoto YAMAMOTO

### 【はじめに タキワシへの興味】

この数年、ずっと気になっていたところがある。ペルーアマゾンのタラボト近郊にある「タキワシ」(Takiwasi)という薬物依存者向けのリハビリセンターである。タラボトはコカ栽培のさかんなサン・マルティン県の中核地であることから、コカの葉とコカインの中間精製物にあたるコカイン・ペースト (pasta) やコカイン・ベース (base) の集積地にもなっており、その意味ではこうした施設があること自体は不思議ではない。正式名称は「麻薬中毒リハビリテーション・伝統医療研究センタータキワシ」(el Centro de Rehabilitación de Toxicómanos y de Investigación de las Medicinas Tradicionales Takiwasi)。医師2名に心理セラピスト6名の他、看護師1名、薬物依存カウンセラー1名 (Mabit, 2012)、さらに事務管理部門などを含めて約40名のスタッフで運営されているサン・マルティン県公認の保健センター (Centro de Salud) である。ただし、そのリハビリの内実は私たちがごく常識的に想像するものとはずいぶん異なっている。1992年の創立以来、このタキワシではアマゾンの伝統的なシャーマニズムの技法と現代の心理学的アプローチが接合され、しかも前者における中核的な存在である幻覚性植物アヤワスカを使った儀礼が流用されているのである。

アヤワスカ (Ayahuasca) とは、アマゾンの森に自生するキントラノオ科 (*Malpighiaceae*) の蔓植物 (*Banisteriopsis caapi*) であり、これにアカネ科 (*Rubiaceae*) のチャクルーナ (*Psychotria viridis*) の葉を加え、数時間煮つめた混合液も同じくアヤワスカと呼ばれる。現地では聖なる植物であり液体だが、薬理的には「幻覚剤」(hallucinogen) に分類され、国際条約 (Convention on Psychotropic Substances, 1971) で所持・使用が禁止されているDMT (Dimethyltryptamine) を含む「薬物」でもある。

私たちの周囲に浸透している常識からすれば、「規制薬物を使つての薬物依存の治療」など、悪い冗談にしか聞こえないかもしれない<sup>1)</sup>。しかし、現地の事情からすれば実はそれほどいかがわしいものではない。もともとペルーやエクアドルなど、アマゾン上流域の先住民・メスティソ社会ではクランデーロ (curandero) と呼ばれるシャーマン的な治療師が共同体や個人に降りかかる様々な災厄を処理してきた<sup>2)</sup>。我々のカテゴリーでいう「病気」への対応もそのひとつ

である。コカの葉しかなかった時代はともあれ、化学的に精製されたコカインやその中間精製物に対する依存症が出現してきた際も、近代的な医療サービスを十分に利用できない地域では克蘭デーロ以外に頼るすべがない（現在でも不十分な地域がほとんどだし、専門的な依存症リハビリセンターなど求めようもない）。克蘭デーロの方も、現地で利用可能な薬草を組み合わせて薬物依存に対する治療法を洗練させていく。その中心こそが先のアヤワスカを使用する儀礼（以下、アヤワスカ儀礼と表記）であった。当然というべきか、DMTを規制している条約でも、先住民の伝統的な儀礼での使用は許容されている。

タキワシを開設したのはジャック・マビというフランス人医師だが、彼は心と身体、それにスピリチュアルな領域にまで関与していく克蘭デーロのスタイルに深く共感するとともにその効果を認め（"amazing capacity"と表現している [Mabit, 2006:2]）、各種の薬草に関する知識と一緒にそのエッセンスにあたるアヤワスカ儀礼を自身の現場に取り入れたのである。もちろん、自ら現地の克蘭デーロの指導を仰ぎ、修行を重ねた上でのことである（Mabit, 2006:1-4, Dobkin de Rios and Rumnill, 2008:102-103）。もとよりペルーではアヤワスカの使用は違法化されておらず、またタキワシでの実践を重ねるなかでロサ・ヒオベ・ナカザワ医師により報告書がまとめられ、その影響を受けて2008年には「アマゾン先住民のコミュニティで実践されているアヤワスカの伝統的な使用とその知識」はペルー文化局（Instituto Nacional de Cultura）により国家の「文化遺産」（Patrimonio Cultural de la nación）に指定されてもいる<sup>3)</sup>（San José et al., 2013:73-74, <http://www.dejaquesuceda.org/index.php/articulos/-ayahuasca-p-cultural>）。

私がタキワシの存在を知ったのは約20年ぶりにペルーを再訪した2011年のことであった。アマゾン地域としてはプカルバ周辺を訪れたただけだったのだが、そこで目にしたアヤワスカ儀礼の観光化、商品化といった現象が興味深く、帰国後に関連する資料にあたっていた折、この施設に関する記述にも遭遇したのである。その際には直接論考の対象にはしなかったが、アヤワスカ（儀礼）をめぐる観光化とはまた別の方向にコンテキストが開かれていることがわかり、機会があれば実際に訪問したいと思っていた。かつて長期調査の対象にしていたエクアドルのアマゾン先住民のアヤワスカ儀礼、あるいはペルーのイキトスやプカルバ、さらにはタラポト周辺でも実施されている先住民・メスティソ（混血）による観光化されたアヤワスカ儀礼との異同も気になるところである。

とはいえ、現在の私の置かれた状況からして、月単位のまとまった調査などのぞむべくもない。往復の移動などを考えると実質的に1週間から10日程度の滞在がせいぜいのところである。それでもタキワシの存在は気になり、とりわけ薬物依存の人たちを対象とするアヤワスカ儀礼には実際にふれてみたかった。また日本語に限定すれば、この施設に関する情報はどの分野においても皆無に等しい状況である<sup>4)</sup>。となれば、通りすがりの旅行者としての訪問記であれ、このユニークな施設について紹介するのも一定の意味があるのかもしれない。そう考えた私は2015年の夏、実際にタラポトに向かうことにした。

\*

\*

\*

タキワシは医療施設であるため、関係者以外の突然の訪問は受け付けていない。それゆえ事

前にメールで訪問の希望を伝え、可能ならアヤワスカ儀礼に参加したい旨を告げていた。その回答によると、スタッフの心理学者（psicólogo）による施設内の案内と面談は可能だが、アヤワスカ儀礼への参加については事前に問診票（Declaración de Salud）とアヤワスカを摂取する動機を説明した申請書（Carta de Motivación）の提出が必要とのことであった。参加する以上はアヤワスカを飲むことが前提ということだ。タキワシでは依存症患者でなくてもアヤワスカを経験したい一般の人々を受け入れている。2週間程度の特別プログラムが用意されており、フランス語話者を対象にしたものはセミナー（seminario）、スペイン語・英語話者を対象にしたものは食事制限療法（dieta）と呼ばれている。いずれも森の中に入り、孤独の中で断食に近いごく簡素な食事をとり、各種の薬草を摂取し、セラピストとの面談があり、そしてアヤワスカ儀礼を数回経験するスタイルである。こうしたプログラムの背景には、変性意識を求めて「ドラッグを使う人たちの探求について正当性を認め、その上で意味のある系統だった経験に方向付けしていくこと、それは『何でもOK』の極端な路線ではなく、また『すべて禁止』といった無益な敵視を避けるため」（Dobkin de Rios et al., 2008:108）という意図がある。しかし私にはそこまでの時間はないし、主たる関心は薬物依存の人たちとのアヤワスカ儀礼の方であった。その意味では、私にとって好都合な回答でもあった。

ただし、当然ながらレジデント（residente）としてこの施設で生活している依存症患者が優先されるため、一般のビジター（visitante）は問診票や申請書に問題がなくてもアヤワスカ儀礼への参加は確約されるものではない。毎週月曜にスタッフのミーティングが開かれ、そこでその週の何曜日にアヤワスカ儀礼を行うのか、参加者はレジデント全員か、レジデントの参加者が15名に満たない場合は外来の患者や一般のビジターも参加できるが、それは誰かといった内容が最終的に決定されるとのことだった。

#### 【8月22日（土）～8月23日（日）準備】

儀礼に参加できるかどうかは不確定なまま、私は次回のミーティングが予定されている24日の月曜にまにあわせるべく、問診票と申請書の作成にとりかかった。問診票はタキワシからの回答メールにファイル添付されており、A4で7ページにも及ぶものだった。日本において通常イメージされる「問診票」のレベルをこえる質問項目も多々含まれている。アヤワスカは強烈な精神活性作用をもつことから、てんかんや精神病に関する質問があるのは当然としても、アヤワスカを含む様々な薬物の経験についての質問、またその薬物を摂取した状況は儀礼的または文化的なコンテキストにおけるものだったのかどうか、さらには変性意識状態（Estados Modificados de Consciencia<sup>5)</sup>）全般に関する質問、臨死体験や憑依現象、超常現象一般に関する質問にまで回答が求められていた。

申請書の方は自由書式で、幼年期からの親兄弟・祖父母との関係にはじまり、現在の家族との関係はどうか、どのような教育を受けていまの職業についたのか、今までの人生で心理的に解決されていないものは何か、サイコセラピーやスピリチュアルな領域での経験、遍歴はどうか、そして何よりタキワシにおいてアヤワスカを摂取しようという実質的な動機はなにか——回答が求められたのは、そのような内容であった。

ほとんどの質問がイエス（Sí）かノー（No）の二者択一式であった問診票の方はともあれ、申請書の作成には時間がかかった。比較的恵まれた環境に育ち、成人してからも周囲に助けを乞うような境遇に陥ったことはない。自慢できることはないに等しいと同時に、深く刻まれたトラウマをいくつも抱えているというわけでもない。その意味では良くも悪くも「ふつう」の人生である。さらにこの十数年は公私ともに大きな変化はなく、人生の転機といえるような事態に遭遇することもなかった。凡庸に自足していたというべきか、ことあらためて自分の人生を見つめなおす契機は久しくなかったように思う。

すでに亡くなって久しい父親との関係を考えてみたのは17年前の葬儀の時以来、いや幼年期まで遡って追体験したのはいつ以来のことか、ほとんど記憶にない。父母の関係がいいとは言えない状態だったからか、末子の私を含めてキョウダイ4人は仲がよかった。ただ成人後は全員が順風満帆の人生とはいかず、夫をガンで亡くした姉もいれば、離婚を経験した姉もいる。兄は四国で父親が経営していた酒造会社を継いでいたが、過疎化の進む地方の街では維持していくことが難しく、6代ほど続いていた酒造りを廃業、転職を余儀なくされた。そんな家族のなか、私自身は大学を卒業しても就職せず、大学院に籍でもあればまだしも、それもない時期に突然インドに行って何ヶ月も帰ってこない、というような具合であった。ずいぶん勝手気ままな人生でもあり、とくに人生前半において周囲にかけたであろう心配やら迷惑やらを想像すると、ただただ申し訳なく思うのみである。

——このような個人史にはじまり、私はこれまでの人生を振り返り、言葉にしていって。身体感覚化した日本語ではなく、自由に操れないスペイン語という外国語での表現を強いられることも、輪郭が曖昧だった経験を意識にのせ、対象化する上でプラスにはたらいたかもしれない。土・日の多くの時間を費やし、また苦勞もしたが、この申請書の作成は私に多くのことを思い出させ、気づかせてくれた。無駄骨に終わる可能性もあったわけだが、途中から「儀礼に参加するため」という前提はどうでもいいとは言わずとも、作成のプロセス自体が貴重な経験になっていった。このような機会をもてただけでも、タラボトに來た意味はあったといえるだろう。あるいはそういった心境になった時点から、もう私にとってのアヤワスカ儀礼は始まっていた、そういう見方もできるかもしれない。

申請書の最後に要求されていた「タキワシでのアヤワスカ摂取の動機」については、すでに問診票の方に「エクアドル・アマゾンでの人類学調査において、シャーマンのもとでアヤワスカ儀礼に参加した経験あり」という情報を入れている。ごく簡単に「2、3年に1度アヤワスカを飲むのは自らの人生／実存を根本的に見つめなおす上で意義深いことだと思っている。この施設のアヤワスカ儀礼は非常に興味深く、様々な意味あいにおいて期待している」とだけ記して完成させ、日曜（8月23日）の夕方、問診票と一緒に添付ファイルにてタキワシに送信した。

## 【8月24日（月）浄化儀礼】

翌24日月曜、午前11時過ぎにタキワシより返信が届く。幸い、提出した書類の内容に問題はなく<sup>6)</sup>、またタキワシ側のスケジュールにも余裕があったのか、アヤワスカ儀礼に参加するこ

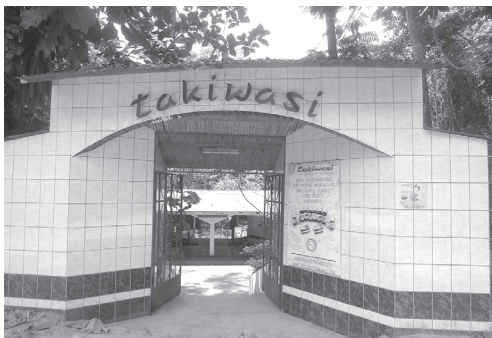


とができるとのこと。以下のとおり、今後の予定と注意事項が詳細に示されていた。

- ・ 今週のアヤワスカ儀礼は26日の水曜に行うことが決定した。今日からアルコールと豚肉、塩、唐辛子は避け、その食事制限をアヤワスカ摂取後、少なくとも3日間は続けること<sup>7)</sup>。
- ・ 今日の午後3時にタキワシのオフィスに来て登録、その後3:30から浄化儀礼 (Purga) に参加。その準備として昼食は野菜スープやサラダ程度の軽いものにすることをすすめる。儀礼のあとは翌日の朝食まで何も食べてはいけない。ホテルでゆっくり休むように。
- ・ アヤワスカ儀礼の前日、25日火曜の午後3時に心理セラピストとの面談。
- ・ 26日水曜の午後8時よりアヤワスカ儀礼。この日の昼食も軽くして、白、もしくは明るい色の服を着てくること。
- ・ 27日木曜はアヤワスカ儀礼の経験を統合するため、あらためて心理セラピストとの面談がある。

感謝の意を伝えるメールを返した後、指定された時間にあわせてタキワシに向かう。タラボト市内から熱帯雨林に入って徒歩で10分ほどの距離である。シルカヨ溪流が近くを流れ、市内に轟くオート三輪タクシー (motocarro) のエンジン音もここまでは届いてこない。「森の中」というには語弊がなくもないが、自然を体感できる、落ち着いた環境である。

門をくぐると、広々とした敷地にいくつか建物が目に入る程度で、リハビリセンターというよりも植物園を連想させる雰囲気だ。正面の比較的大きな2階建ての建物に向かうと、その1階が事務室とのことで、そこでパスポートナンバーにはじまる事務的な登録の手続きと支払いを行った。料金の明細は、この後行われる「浄化儀礼」への参加が60ソル、「アヤワスカ儀礼」150ソル、「心理学者とのサイコセラピー的な面談」(las entrevistas psicoterapéuticas con psicólogos) が60ソル、合計で270ソルであった。リマで両替した際の1ドル=3,2ソル強のレートで換算すると、約84ドルである<sup>8)</sup>。



<タキワシの入り口>



<事務室のある中心的な建物>

建物内を見学させてもらうと、1階は秘書業務や経理用の事務室の他、会議室や長椅子が置

かれたロビーがあり、2階には面談室、研究室、図書室などがならんでいた。階段の横壁にはパネル入りの顔写真が15枚ほど貼られており、尋ねてみるとタキワシとつながりをもつクランデーロたちだという。折にふれタキワシに来て儀礼に参加、指導するのである。南米で一般的なメスティソや先住民的な風貌がならぶ中、「白人」と判断するしかない顔立ちも混じっている。国籍にしてもペルー以外のコロンビアやアルゼンチン、さらに南米大陸をこえてオーストラリア出身のクランデーロまでいた。アマゾン起源ではあっても、アヤワスカをめぐる文化実践が地域性や歴史性とは切り離された現象になっていることがよくわかる。



＜クランデーロたち＞



＜各種の認定書・感謝状＞

また階段下の壁には各種の認定書や感謝状の類いも同様に貼られていた。発行元をみると、国内のものだとペルー保健省や農業省、内務省、タラボト市、サン・マルティン国立大学、ペルー心理学会(Colegio de Psicólogos del Perú)、「薬物のない開発と暮らしをめざす国家委員会」(DEVIDA/ La Comisión Nacional para el Desarrollo y Vida sin Drogas) などである。外国からもアメリカのアショカ財団やドイツのハノーバー万博、ベルギー技術協力 (Cooperación Técnica Belga)、あるいは「先住民のスピリチュアリティに関するアメリカ諸国間協議会」(CISEI/ Consejo Interamericano sobre Espiritualidad Indígena) などから賞を受けているようだ。ペルー内外からの高い評価がうかがわれる。

浄化儀礼が開始される時間になり、指定された場所に向かう。この儀礼はアヤワスカ儀礼に参加する前提になっているもので、レジデントの依存症患者たちは1, 2週間に一度、アヤワスカ儀礼と同じ頻度でこの儀礼に参加する。私のようなビジターもアヤワスカを摂取する準備段階として参加しなければならない。その目的は名称が示すとおり「心身の浄化」(Purga/ Purgative [英]) であり、具体的には、薬草を煎じた液体を飲んだ後、続けて大量の水を飲み、その上で胃の中身を吐き出すというものだ。薬物依存症患者にとっては嘔吐(場合により下痢)を通じてのデトックスという位置づけであり、禁断症状を緩和させてくれるものでもある<sup>9)</sup>。使用される植物としてはSaúco (*Sambucus peruviana*) やNardo (*Amarillis sp.*), Rosa Sisa (*Tagetes erecta*), Paico (*Chenopodium ambrosioides*), Tobacco (*Nicotiana tabacum*) などがあげられる(Mabitt, 2006: 9)。ブカルパやイキトス周辺の先住民・メスティソによるシャーマニズムの文脈でも、「吐く」という行為は身体だけでなく精神的な「汚れ」を排出するというシンボリックな意味あい

が付されていたが、タキワシでも同様である。

儀礼が行われる集会的な建物に入ると、すでに15人ぶんの準備が整っていた。小さな木製の腰掛けが壁に沿って半円を描くように人数分ならべられ、その前にバケツとトイレットペーパー、それに容量3リットル程度の縦長プラスチック容器の3点セットが置かれている。壁にもたれて座っている人もいる。先に来た参加者であろう。



＜浄化儀礼に向かう参加者＞



＜儀礼をリードするスタッフ＞

15人全員がそろった頃、最後に入ってきた数人が場の中央に置かれたプラスチック製の簡素なイスに座る。儀礼をとりしきる心理セラピストAとメスティソの克蘭デーロE、それに補佐役である。新顔の私を意識してのことか、言葉はスペイン語で大丈夫が確認した後、今回はサウコ（Saúco）を使うことが告げられ、それからサウコを飲んだ後は最低でも2杯ぶんの水を飲むように、という簡単な注意が与えられた。サウコは呼吸器系への薬効をもち、アヤワスカなど他の薬用植物と同様に施設内で栽培されている（草でなく）灌木である（<http://www.takiwasi.com/>）。

他の参加者をみわたすと、女性はふたりだけで20代から30代前半の男性が中心である。性別と年齢にはある程度のかたよりがあるが、それ以外の点については多様性に満ちている。中南米的な基準ではとくに目立つところのないメスティソ男性もいれば、半世紀前のカウンターカルチャーを想起させる白人男性もいる。またその一方ではペルーの "普通のおばちゃん" と表現するしかないような中年女性も混じっている。おそらくは国籍も様々であろうし、誰が依存症患者で、誰が私のようなビジターかの判別もつかない。いかにも心身を病んでいる風情の人もいないため、依存症のリハビリセンターにいることを忘れてしまいそうでもある。

儀礼はすぐに始まった。1人ずつ端から順番に克蘭デーロのところに呼ばれ、プラスチックのコップに入ったサウコの汁が渡される。参加者にコップを渡す直前には、克蘭デーロによってサウコにタバコの煙が吹き込まれる。先住民・メスティソ社会でのアヤワスカ儀礼ではおなじみの「吹き込み」（soplada）である。タキワシの外ではともあれ、この施設を調査したブストスによれば、ここでの吹き込みは「薬の物理的およびスピリチュアルな力を高めるため」だという（Bustos, 2006:34）。そのアマゾン式の手続きに重ねて、克蘭デーロはコップの上でキリスト教式に十字を切り、それから参加者にサウコを手渡す。参加者は一息で飲み干し、自

分の場所に戻る。7, 8 番目あたりで私にも同様のことが繰り返され、私自身も他の参加者と同様にふるまった。間近にみたサウコは濃い緑色で、日本でいう青汁そのものである。吹きかけられたタバコの臭いが気になり、また味に関する予備知識もなかったため、口に入れる前にはそれなりに緊張し、覚悟もした。ただ実際に飲んでみると、とくにクセのある味というわけでもなく、まさに「青汁の一種」という程度の印象であった。

セラピストも含めて全員がサウコを飲み終わると、さわやかな芳香を放つ液体 (agua de florida) が屋内全体に吹きかけられた。そして克蘭デーロの歌がはじまる。ペルーでは「イカロ」(icaro) と呼ばれ、アヤワスカ儀礼の際に必ず登場する治療歌だ。タキワシという名称にしても「歌う家」を意味するケチュア語に由来している(「タキ」[taquina] = 「歌う/歌」、「ワシ」[wasi/huasi] = 「家」)。イカロの合間には、先ほどの吹き込みが今度は各参加者の頭頂部に対して行われる。「精霊に対する防御」とのことだが、このあたりは現地の先住民・メスティノの文化要素や意味論がそのまま取り入れられている印象だ。

イカロが開始されるのとほぼ時を同じくして、各参加者には目の前のプラスチック容器になみなみと水が注がれる。普段見慣れている2リットル入りのペットボトルから類推すると、2.5リットル程度の量はありそうにみえる。「これを飲め」というのである。

両手で容器を抱えて縁に口をつけてみると、常夏の熱帯雨林の中という事情をわりびいても、水は常温というより生暖かいかんじだった。まだ冷め切っていない煮沸した水なのだろう。飲む量を考えれば適切な温度かもしれない。とりあえず飲んでみる。最初のうちは問題ない。もっとも、水だけを飲み続けることも難しい。当然ながら徐々に苦しくなってくる。それでも我慢して飲む。そのうちに周囲で水を吐き出す音が聞こえてくる。嘔吐する人の数が増えてくるにつれ、初参加の私は焦り気味になる。しかし、気持ちとは裏腹に一口で飲める分量はむしろ減っていく。軽く吐き気は感じるものの、唾液がでるだけのことである。プラスチック容器に大量の緑の液体を吐き出す参加者たちの姿、その際にともなう濁音そのものの音、どちらにしても心地よいものではない。ではありながらそれがうらやましい。水を飲み始めて30～40分程度だとは思いますが、多くの参加者はもう2杯目の水にとりかかっている。克蘭デーロのイカロも聞こえてくるが、正直なところ歌を聴けるような状態にはない。すでにセラピストのAから「とにかく水を飲まないことには、吐きようがない」と個人的に注意されてもいる。自覚的には「死にもの狂い」で飲み続け、なんとか容器に入っていた水を飲み干した。しかし、それが限界であった。吐けない。吐けないし、もう飲めない。とても2杯目の水に口をつける気にはなれない。私はあきらめた。その時点で5時に近い時間だったと思う。

ふと顔をあげると、太陽の光が窓から斜めにさしこみ、空気中の塵が光の粒のように見えたのが印象的であった。サウコに変性意識をもたらす性質はそなわっていない。自然発生的な軽い変性意識に入っていたのだと思う。やや捨鉢な気分で白く光る塵が舞っているのをぼんやり眺めていると、水を飲むのを放棄した様子を見てとったセラピストAが再びやってくる。そこで「私は他の参加者よりも年をとっている。だから身体の反応が悪いのだと思う。どうしても吐けない。吐きようがない」と訴えた。すると「だからこそ、水を飲め！」(Por eso, ¡toma agua!) とあらためて強く促された。そのとおりかもしれない。反論することもかなわず、ほ



んのわずかだけ気を取り直し、少しずつ飲み始める。変化はない。気分が悪いだけだ。

途方に暮れていたところ、見るに見かねてということか、隣で豪快に、かつ盛大に吐きもどしていたビジターの若い女性が声をかけてくれた。「マコト、少しずつじゃなくて、一気に飲まない。こんな風に」と模範を示してくれた。なるほど、ペースダウンした私の飲み方では、身体が水分を吸収してしまいかねない。嘔吐という「自然な」身体的拒否反応をひきだすには、身体による水分の吸収ペースというもうひとつの「自然」を無視して乗り越えなくてはならない。もう一度気分を新たに、というよりヤケクソに近い気分で容器をもちあげ、一気に飲んでみた。それまで、どこか自分を守ろうとしていたのかもしれない。その（自然の／本能的な）スイッチが切れたのか、それなりの量を一息で飲むことができた。それを2、3回繰り返すと、猛烈な吐き気が襲ってきた。喉の奥から突き上げてくるものがあり、あわてて下を向くと、緑に染まった水が奔流となって口から噴出する。それも大量に、しかも複数回に及んで。ついに吐くことができた。爽快である。

胃の中にたまっていた大量の液体を排出した爽快感だけでなく、自分の殻をひとつ破ることができた気もする。セラピストのAと目が合うと、「やったな」とばかりに親指を突き上げ、サムアップのポーズで答えてくれた。この時点で時計をみると午後5時20分であった。水を飲み始めたのは4時頃、まったく想定外の辛い1時間余りというほかはない。この浄化儀礼は抑圧されていた感情の表面化、具体化につながり、そのぶんサイコセラピーに資するものだという話だが（Håland, 2014:39）、私にとっては「抑圧されていた感情」というよりも大量に飲んだ「水そのもの」を表面化すること、つまり吐くという行為、吐けたという達成それ自体が思いがけないカタルシスとなった。他の参加者たちからすればスタートラインについただけの話ではあれ、個人的な心情としては、まさに「心身両面における浄化」を果たした気分である。

その10分後、全員が十分に吐き終わり、嘔吐の音が聞こえなくなると儀礼は終了となった。とくにあらたまった宣言はない。自分が吐いた緑色の水をためていたバケツをもって建物の外に出る。敷地の一角に掘られた穴に各自バケツの中身を捨て、流水でバケツと手を洗って解散である。

別れ際、セラピストから「夜は何も食べないこと、これからアヤワスカ儀礼まで、そして儀礼が終わっても3日間アルコール類と豚肉、トウガラシは控え、性的な接触も避けるように」との指示をうけた。

## 【8月25日（火）心理セラピストとの面談】

この日は治療チームのまとめ役（coordinador）である心理学者G氏と面会、彼からタキワシに関する簡単な説明を受けた後、施設内を案内していただいた。私個人についての面談は、施設案内の後に別の心理セラピストが担当するとのことであった。

Gからは、おおむね以下のような話をうかがった。

——タキワシは薬物依存が中心ではあるが、ギャンブルその他あらゆるタイプの依存症患者を受け入れている。共同生活するレジデントの数は15人を基本とする。ただペルーの法律では男女混合のスタイルは許可されていないので、外来患者の場合は別としてレジデントはすべて

男性である。現在のレジデントは12人で、国名をあげるとベルーが6人、あとはスペイン、フランス、アルゼンチン、コロンビア、チリ、メキシコ各1人という内訳。患者ではないビジターにしてもベルー内外から多様な人々がやってきている。やや外国人が多い印象だが、その多くがアヤワスカの摂取を希望する。その数は年間で400人くらい。昨日の浄化儀礼にしても、レジデントは10人でビジターが5人含まれていた。

レジデントの治療期間は9ヶ月から最長で12ヶ月、3～6ヶ月の場合もなくはないが、きわめてまれである。他の依存症リハビリ施設より治療成果が良好と思われる理由は、複数の分野横断的（multidisciplinario）なアプローチをとっていることにある。身体的（físico）、心理的（psicológico）、スピリチュアル的（espiritual）、それに人間的（humanista）アプローチのことだ。スピリチュアル的アプローチとは、森の中で行う食事制限療法（dieta）とタキワシで行うアヤワスカ儀礼をさしており、人間的アプローチとは共同生活を通じて人間的なつながりを持ち、それを維持していくこと、そのプロセスを重視するスタイルのことをさしている。ひとつのアプローチだけでは治すことは難しい。それぞれ、同じ重要性をもっている。治療法について一般的なプログラムは存在しているが、当然患者ひとりひとり個別の対応も考えている――

興味深い話ではあったが、一方ではタキワシの公式HPから得られる情報を大きくこえる内容でもなかった。もちろん、話が深まらなかった原因は私にある。スペイン語の運用能力という問題もあるのだが、それ以上に前日の夜、クレジットカードが不正使用されていたことがわかり、その対応に追われていたのである。経由地のロサンゼルス、あるいはエクアドルのキトでカードがスキミングされていたようで、すでにアメリカ国内でカードが使われていた。このままでは空路でタラボトから移動することもままならない。数時間前に心身の浄化をはたしたばかりではあったが、落ち着く間もなく日本に国際電話をかけたたりメールを送受信したり、25日朝になってからはネットでのカード決済ができないためタラボト市内の航空会社のオフィスに直接足を運んだり、という具合であった。ほとんど寝ることもかなわず、午後の面談に備えて準備をすることができなかった。となれば、Gにしても通り一遍の説明で十分だということにもなろう。気分を害してしまった可能性すらある。申し訳ない思いである。

ただ、その後の施設案内については、日本も含めて依存症関連の施設を訪問したことのない私にとって、きわめて興味深いものであった。一部写真を紹介しておこう。



写真① デトックスのための個室。最初の1週間はここで薬草を摂取しながら禁断症状に1人で耐えなければならない。心理セラピストとの面談以外はあらゆる人的接触が禁じられる。レジデントとして共同生活に入るのは、この段階を終えてからの話である。



②レジデントの寝室。



③木工作業場。作業療法も取り入れられている。



④レジデントはみなキリスト教徒とは限らないが、このような礼拝堂も存在する。



⑤危機的な状況に陥ったレジデントはこの建物に収容される。



⑥アヤワスカなどタキワシ内で使用される植物はここで加工処理される。



⑦売店では植物から抽出したタキワシ製の各種薬剤やイカ口のCDなどが販売されている。

この他にもレジデントの作業場でもあるパン工房や食堂、彼らが利用するジムやサッカー場、さらに薬草園とそこで栽培されている植物の研究や薬剤開発のための実験室、マビ氏自身の蔵書や外部からの寄贈書が収められている図書室などを目にする事ができた。

その後は心理セラピストのダナエ・サエンス氏との面談である<sup>10)</sup>。私の個人史や現在の心理状態などが話題になると想像し、少し緊張もしていたのだが、まったくの肩すかしであった。



翌日のアヤワスカ儀礼について、集合時間は午後8時であり、その際にはFという女性が詳しく説明してくれる、明日の参加者はみなタキワシでアヤワスカを経験している人たちなので私にだけ説明がなされる、夜は冷えるから寒さ対策をしっかりとすること、終了後に移動するのが難しい状態ならそのまま泊まってもかまわないなど、実地的な「注意事項の伝達」がほとんどであった。

内面に関する言葉としては、アヤワスカ儀礼は「セラピー的なものだから、明確な目的をもつこと、それが経験のガイドになってくれる」の一言だけである。前日に提出した申請書について何か問題はないかと聞くと「ない」(Nada)で終了。苦労して2日にわたって作成し、それなりの覚悟をもって臨んだだけに、物足りなさを感じるが一面ではホッとしたところもある。ともあれ、これでアヤワスカ儀礼に参加できる条件がすべて整ったことになる。先ほど案内された売店でマビ氏のイカロが収録されたCDを購入(35ソル=11ドル)してホテルに戻った。

### 【8月26日(水) アヤワスカ儀礼】

月曜のメールで指示されたとおり、昼食は塩抜き麺入り野菜スープだけにして、白のポロシャツと寝袋を用意した後、ホテルの部屋で夜になるのを待つ<sup>11)</sup>。これまでに一定の経験はあるとはいえ、何が起ころのか明確な予測は難しい。緊張もすれば不安もつってくる。

夕闇が迫ってきた夕方6時頃、タキワシにでかける2時間ほど前か、履いていたビーチサンダルの鼻緒が切れた。海外の安ホテルでシャワーを浴びる時や部屋履き用として長年使い込んできたものだ。いつ鼻緒が切れてもおかしくはない。とはいいいながらも、やはり気にはなる。すぐに捨てることはせず、足の親指と人差指に妙な力を入れて、鼻緒の切れたサンダルを無理に履き続けてみたりした。状況の不確実さと切実さが呪術的な発想や行為を生じさせる。自分自身に向けての即興的なまじない、呪術的な表現行為というところか。

バイクタクシーで8時にタキワシに到着。見慣れない私の顔を見て、小柄の女性が声をかけてくる。Fだった。彼女もセラピストである。すぐに儀礼の行われる場所に案内される。浄化儀礼の際とはまた別の集会所的な建物で、「マロカ」(Maloca)と呼ばれていた。アマゾンの先住民社会において、複数の家族が暮らす仕切りのない大きな共同家屋を指す言葉である。浄化儀礼の際と同様、壁に沿って円を囲むようにクッションとバケツ、トイレットペーパーが置かれている。

比較的出入口に近いクッションを座席として指定され、Fの説明を聞く。姿勢は好きなようにしてよいが、横になってはいけない。逆に言えば、寝転がらなければ、脚を抱える、胡座をかく、脚を投げ出す、何でも好きにしておかまわない。叫び声とか嗚咽の音が聞こえてくるとか、周りで何か特別なことが起きても自分たちスタッフが対応するから、とにかく自分に集中すること。そこはエゴイスティックでOKだ。アヤワスカの効果が感じられなくても、焦らずに待つように。儀礼が始まったらこの場から勝手に出てはいけない。トイレに行くときは自分たちに一言伝えるように。行方不明になっては大変だ。トイレから戻ってきたら、入口の前で待つこと。そこでクランデーロから吹き込み(soplada)を受ける必要がある。スピリチュアルなレベルでの攻撃から身を守る防御(protección)のためだ。それが終わってから自分の席にもど



るように。アヤワスカの効き目が強すぎる場合は深呼吸を、どうしようもない状態になれば、自分たちを呼べばいい——そのようなアドバイスを受けた。

私の両隣は、ひとりアルゼンチン人で30歳前後の男性レジデントM、もうひとりビジターでアヤワスカに興味をもつという20代半ばのフランス人男性であった。そのレジデントMから、儀礼が始まるまでに "植物のシャワー" (ducha de plantas) を浴びておくよう告げられた（またしても「防御のため」である）。シャワー室に向かうと、いくつか並んでいるブースのひとつに桶が置かれ、その中に各種の草花が柄杓と一緒に水に浸けられていた。水には浄化儀礼の時と同じ香りを放つ液体 (agua de florida) が加えられている。その水を柄杓ですくって身体にかけるのだろう。同様のことは旅行者を対象にした観光化、商品化されたアヤワスカ儀礼でも行われている。その不自然に爽やかな香りが触媒となり、2年前のイキトスでの経験が一瞬よみがえる。その記憶は消えるにまかせ、目の前の冷たい水を何度か身体にかけ、最後に一度、頭からかぶった。

マロカに戻ると、そこかしこで雑談していたり、ギター 2 台で即興的なセッションが進行していたり、くつろいだ雰囲気である。私も隣のMにレジデントになった経緯を聞いたり、彼から新参加者としてのアドバイスを受けてたりして過ごした。「リラックスしていればいい、"植物" (planta) が教えてくれるから」「抵抗するのが一番よくない、自分を開くことだ」ということであった。



＜アヤワスカ儀礼の行われるマロカ＞



＜儀礼開始前の参加者たち＞

タキワシ側のスタッフも1人、また1人とマロカに入ってくる。スタッフの数が増えるにつれ、声はまばらになり、しだいに場が引き締まっていく。ちょうど9時になった頃、照明がやや暗めに切り替えられた。今夜の儀礼を担当するのは、浄化儀礼でお世話になったクランデーロEとセラピストAに加え、先のF、それからタキワシ事務局長でもある心理セラピストのハイメ・トレス・ロメロ氏、さらに外科医のロサ・ヒオベ・ナカザワ氏（外見も日系女性）である。残念ながらタキワシの創立者ジャック・マビ医師は「カゼのため欠席」とのことで、今夜は "マエストロ・ハイメ" が儀礼を取り仕切るとのことであった。セラピストがクランデーロ、しかもリーダー役である。参加者はレジデントが12名、ビジターは隣のフランス人男性に40歳手前くらいのアルゼンチン人男性、それに浄化儀礼の際私に水の飲み方を伝授してくれた若い

ラテン系白人女性、それに私を加えて計4人である。ビジターとはいえ、私以外は常連だ。

アヤワスカを飲む前には場を安全なものしておく必要がある。まずハイメが壁に沿って歩きながら指ではじくように水を撒き、次に先の芳香水（agua de florida）を口に含み、四方に、そして上下に霧状にしてふき出す。それが終わると煙の立った香木を盆にのせ、レジデントの1人と一緒にその盆を抱えてマロカの周囲をめぐる。「マロカを外側から守る」ということだが、密教でいう「結界をはる」ようなものだろうか。アマゾンに限らず、心身の不調を「何らかの呪物の侵入」の結果として捉える発想はカリブ海からフエゴ島まで中南米の広い範囲で見られる。そういった病因論と関係する行為のようにもみえる。これまでに何度か繰り返された「防御のため」という説明にしても同様である。何周かした後、ふたりはマロカに入りなおし、今度は壁に沿って内側をめぐる。線香とは似て非なる独特の香りと、もうもうたる白い煙が室内に充満する。最後は香木が各自の目の前に置かれ、ひとりひとり自分の手で煙を身体、とくに頭にかきこむ。この手続きが最後のひとりまで終わると、準備は完了のようだ。言葉を発する者は誰もいない。はりつめた空気が場全体を包みこむ。

マエストロ・ハイメが扇の要の位置に胡座をかいて座る。彼以外のスタッフはその両側で脇を固めるような構図である。アヤワスカにタバコの煙を吹き込み、キリスト教の神に祈りを捧げ、アヤワスカの精霊を呼び出すイカロを歌う。ハイメの背後にはグアダルーペの聖母や大天使ミカエルなどキリスト教系の宗教画が掲げられ、カトリックの神父Aも同席している。自由参加だが、この儀礼の前にはミサも開かれていたようだ。教義的には折りあわないアマゾンのシャーマニズムとキリスト教の要素がシンクレティックに「融合」されることなく「共存」している。いかにもグローバル化の時代ならではの現象に映るが、このようなスタイルはかねてよりペルーアマゾンの先住民やメスティソ社会でも珍しいものではなかった（Luna, 1986:30）。むしろこういった融通無碍さにこそ、アマゾンの「伝統」をみるべきかもしれない<sup>12)</sup>。

レジデントのひとりが呼ばれ、ハイメの前で膝を突いた姿勢をとる。杯のような器にアヤワスカを注いでもらい、吹き込みを受けたあと、立ち上がってその杯を仰ぐ。飲み終わると器を返し、黙って自分の席にもどっていく。その後、時計とは逆の順でひとりずつ同様のことが行われる。アヤワスカを飲み込む直前、「みなとともに健康を」（Salud con todos）と唱える参加者が多い。他の者も「健康を」（salud）と応える（"salud"には「乾杯」の意もある。掛詞的にも聞こえる）。セラピストはもちろん、医師のナカザワや神父Aまで含めて、その場にいる全員がアヤワスカを飲む。傍観者的な立場の者は誰もいない。器も共通である。こうした共同性を旨とするスタイルはスタッフに対する信頼を醸成し、心理セラピーにもプラスの効果をもたらすことだろう。私の順番は最後に近い17番目であった。想像を絶する悪辣な味に辟易しながら一息に流し込む。アヤワスカの量は人により調整されるというが、30～40mlくらいだろうか。最後はハイメ自身である。マエストロが飲み終えた時点で、時刻はすでに9時50分になっていた。

電灯がすべて消される。とたんに周囲の森にいる虫の声、鳥の声が耳に入ってくる。暗闇になると音が増幅され、エコーがかかったように感じられる。木々の間を流れる風の音も聞こえてくる。ほどなくハイメの朗々とした歌声が響いてきた。イカロである。歌に合わせて草木の

葉同士がこすれあう音も同時に聞こえる。先住民・メスティソ社会のクランデーロと同様、葉っぱを束ねた「シャカパ」(shacapa)を使っているのだろう<sup>13)</sup>。神道の神主が振る大麻／大幣(おおぬさ)を連想させるものだ。"Dios" (神), "Madre Ayahuasca" (母なるアヤワスカ)といったスペイン語で歌われる箇所が一部聞き取れるだけで、全体として歌詞はほとんど理解できない。イカロには様々な種類が存在するが、ハイメのイカロを録音したCDなどによると、キリスト教の聖人やアマゾン起源の各種の精霊を呼び出すため、(悪意をもつ)精霊から身を守るため、アヤワスカの効果をコントロールするためなど、状況に応じて多様なイカロが使われているようだ。

イカロを歌うのはハイメだけではなかった。30分ほど経過した頃だろうか、今度は浄化儀礼の際のクランデーロEが歌いはじめた。タキワシのHPには治療スタッフとして紹介されていないので、彼はセラピストは兼ねておらず、クランデーロ専門ということになる。2日前にも感じたことだが、豊かな声量に正確なピッチ、メリハリのきいた広いダイナミックレンジ——12音階の西洋音楽という特定の音世界になじんできた耳にとっては——どれをとっても見事な「聴かせる」歌い手である。イカロはこの2人の男性を中心に進行していく。ただ儀礼の後半ではハーモニカも登場し、さらには女性のナカザワ、さらに私の世話役でもあったFもイカロを歌うことがあった(ナカザワについてはCDも販売されている)。こうしたイカロはアヤワスカのビジョンの中で精霊から、あるいは師匠のクランデーロから与えられるという。アマゾン先住民に関する民族誌上の記述や私自身がこれまで聞いてきた話と同じである。事務室近くの階段横にクランデーロたちの写真が貼ってあったが、彼らがその師匠筋にあたるのだろう。ただ、私自身は男女2人ずつ4人のクランデーロが登場し、ハーモニカを挟みながら交替でイカロを歌い続けるような儀礼には立ち会ったことがない。一部にはタキワシならではのスタイルが試みられているようでもある。

やがて歌声に混じって嘔吐の音がそこかしこから聞こえてくる。アヤワスカの効果がでてきたのだろう。クランデーロがタバコに火を付ける際、周囲にいる参加者の姿が一瞬ほのかに照らしだされる。多くは目を閉じてじっとしている様子である。彼ら／彼女らがどのような経験をしているのかはわからない。レジデントには「心を落ち着かせて、イカロを聞くように」という一般的な指示だけが与えられ、あとは自己観察(auto-observación)が基本になっている<sup>14)</sup>。これもタキワシの外と同様、「アヤワスカ自体が重要なことを伝える」という発想にもとづくものだ。

やがて男性クランデーロふたりのうち、歌っていないEが参加者の前に来て、端からひとりずつ頭頂部に吹き込みをしていく。イカロの担当がEになれば、今後はハイメが吹き込み担当になる。これは「防御のため、悪いエネルギー(mala energía)が入らないようにするため、また心身のバランスをとるため(estabilizar)、クランデーロのスピリチュアルな力(fuerza espiritual)を吹き込むため」だという。「エネルギー」「バランス」といった言葉遣いからすると、アマゾン流の自然観、身体観にニューエイジ的な要素が入りこんでいるようにもみえる。吹き込みの効果について、近くに坐っている参加者たちに尋ねてみたいところだが、声をかけるのははばかれる。私自身には自覚的な変化は感じられない。トイレから戻ってきた参加者も同

様に吹き込みを受けている。

11時をすぎた頃だろうか、私にも幾何学模様など、様々なビジョンが見えてきた。イカロが聞こえてくる方向に顔を向けると、歌っているハイメが暗闇のなかで光り輝いていた。光の色は淡い黄色である。「光に包まれている」というより、ハイメ自体が光の塊になっているかんじだ。その外縁からは周囲の闇に向けて光の粒子が飛び散ってる。声の抑揚に正確にシンクロして光の塊は大きく膨らんだり縮んだりを繰り返す。歌い手がハイメからEに交替すると、ハイメの光は消え、今度はEが光の塊になる。Eのイカロはより威厳をとまって響き渡り、音の振動が私の身体（と感じるもの）をびりびりと震わせる。気がつくと周囲に向けて放たれる光の粒子には色がついていた。赤や黄色、緑や青など、多彩な色が入り交じり、そのひとつひとつの粒子が闇の中で鮮やかに浮かび上がる。よく通るバリトンの歌声がトーンをあげ、高音域に昇りつめた際には光の塊も振動しながら膨れあがり、多彩色の光の放射は激烈かつひととき華麗なものになる。音が光に変換され、視覚化されている。音声を光や色として見る／聴く、視覚と聴覚の相互乗り入れ、知覚の「共感覚」と呼ばれる現象である。もちろん他の参加者がハイメやEのイカロを（イカロを歌うハイメやEを）どのように経験しているのかはわからない。マビの語るところによれば、クランデーロに限らず参加者同士は相互に影響を与えあっており、その『『エネルギー』("energías") という言葉を使って形容するしかないような精妙な相互交換 (intercambios sutiles)』(Mabit, 1992:9) は人により光として感じられたり、振動として、あるいは音声として感受される。ある場合にはその影響を受けて突然攻撃的になったり、激しく嘔吐したり、さらには犬が身体を震わせるようなことが起こるという (Mabit, 1992:10)。ただ私にとっては光が飛沫のように飛び散り、声が鳴り響くのが瞬間ごとに鮮烈な残像を残すばかりで、自覚的には審美的な経験以上のものはない<sup>15)</sup>。

続けてイカロを歌うのはナカザワ医師、そしてセラピストFと女性2人に交替していった。しかし歌っている彼女らの身体がまぶしく輝くことはなかった。共感覚的な現象も現れることはなく、暗闇にもどってしまった。男性ふたりのイカロと比較すると声も小さい。そうすると自然に自分の内面に意識が向かうようになる。

前日に指示されていた「明確な目的」について、事前に少し考えてはいた。もちろん「調査研究、データ収集のため」といった上っ面の建前では話にならない。もっと自分自身の深いところに直接かかわることであれば、あれこれ迷った末、ひとまず「仕事の領域」に焦点を合わせることにしておいた。大学内外の状況は21世紀に入りまったく異なった様相を呈している。「自己と世界をより深く理解する」というより「自己を世界に適応させる」発想が支配的になり、教員としてのセルフイメージを維持することもままならない。その中で自分と仕事との関係をどうみなすか、自分と学生、勤務大学、大学の世界一般、教育一般、様々なレベルで何らかの洞察を得ることができれば、というのは偽りのない本音でもあった。とはいっても、そういったもくろみとつながりのあるビジョンなり教えなどは現れない。こちらからも意識的に特定の方角に探りを入れるようなことは行わず、成り行きにまかせていた。他の参加者はどうだろう。おそらくは依存症がらみの過去のトラウマ的な出来事をそのまま、あるいは別のイメージに変換された形で再体験していたり、アヤワスカを代表とする各種の動植物、森や川の精霊



にであったり、さらには悪魔や天使、神といったキリスト教関係の霊的存在に翻弄されるなど、各自の内面では多種多彩なドラマが進行中なのだろう (Stuveback, 2015)。

思いがけず、いきなり父親がビジョンに登場してきた。生前、私との間にとりたてて確執があったわけではない (と思う)。土日に申請書を書いた折、久々に幼少期からの記憶をたどったことと関係しているのだろうか。何にせよ、その父親からは次のようなシンプルなメッセージが伝えられた。「まだこちらに来るにはずいぶん時間がある」「兄弟仲良く暮らすように」「しかし、お前たちみんな仲良くやっているようだから、心配はしていない」といったものだ。その父親のビジョンがある種の引き金になったのか、後に続いて母親と兄姉、友人知人、先生など、子ども時代から現在にいたる長い時間のなかで親しくつきあった人、面倒をみてもらった人、目をかけてくれた人などのビジョンが次々に現れた。そういった方々に対する感謝の気持ちが湧いてくると同時に、その気持ちをきちんと表してこなかった自分自身のありようも突きつけられた。これまでに参加したアヤワスカ儀礼でも、何度か思い知らされたことではある。マビも「個人史の再調整」(reajuste de la historia personal) はアヤワスカ儀礼における経験の典型 (のひとつ) であり、それにともなう感情は「ありがたさと申し訳なさ」(gratitud y perdón) だと指摘している (Mabit, 2012:9)。似たような経験をしている最中の参加者もいるのかもしれない。それ以外にも様々なビジョンが現れたが、何らかのメッセージ性が感じとれないものは断片的なイメージとしてすぐに消えていく。記憶にとどまることもなく、ただ私の前を通り過ぎていくだけである。

日付が変わった 0 時 30 分頃、2 杯目のアヤワスカとなる。これは希望者だけが対象である。トライするかどうか F に尋ねられたが、私は遠慮することにした。今までの経験からして、2 杯目を飲むと嘔吐に加えて下痢になってしまう可能性が高く、精神的な側面にしてもこの後どのような世界が展開されるのか、少なくともある程度は経験済みで予想がついたからである<sup>16)</sup>。ビーチサンダル的一件も一瞬頭をよぎり、そのことも 2 杯目を断る方向に私の気持ちを傾かせた。

隣のフランス人ビジターは積極的に 2 杯目を希望した。ほどなく激しい嘔吐がはじまる。男女 4 人のクランデーロが交替で歌うイカロは途切れることなく続いている。ごく稀にハーモニカの音が合間に流れるのも同様だ。他に聞こえてくるのは時折トイレに向かう者の足音、戻ってきて吹き込みを受ける音くらいである。ほぼ全員が白い服を着ているため、暗くても誰かが動けば白っぽい影が移動するのが見える。その白い影が動いていくのを漫然と眺めつつ、私はイカロを聞きながら時を過ごした。何かを考えたり意識を焦点化させることもなく、ただ流れにまかせるだけである。どこから洞察がもたらされるということもない。ただ、午前 2 時頃になっても眠くはない。きわめてクリアに覚醒している状態である。もっとも、少しずつアヤワスカの効果は穏やかになっていく。

完全に効果がなくなったのは午前 3 時前後だと思う。あいかわらずイカロは続いているが、この場で歌を聞いている状況自体が退屈に感じられるようになり、同時に眠気も襲ってくる。横になりたいところだが、それは禁じられている。座ったまま持参した寝袋を頭からかぶり、ただ儀礼の終了を待つだけになる。

半ば居眠り状態でいたところ、突然電灯がつけられた。儀礼の終了に明確な区切りはなかったようだ。時計をみると午前3時24分であった。明るくなると同時に場の空気はゆるみ、あちこちで言葉が交わされるようになる。深夜というよりむしろ明け方に近い時間でもあり、すぐにレジデントたちは三々五々自分たちの部屋に戻っていく。マロカでそのまま寝てもよいと言われたが、タラポト市内に戻るハイメの車に同乗させてもらうことにした。ナカザワ医師やA神父、アルゼンチン人の男性ビジターJも一緒である。30代後半かと思われるJはこの2年間タキワシに通っていて、アヤワスカ儀礼への参加はこれで24回目だという。「長期間、何度も繰り返していると、ビジョンは少なくなってきた、その一方で思考が深まっていく。自分の内へ内へ・・・」と語ってくれた。ホテルの部屋に戻ったのは午前4時前である。

### 【8月27日（木）面談とその夜の試練】

タキワシのアヤワスカ儀礼では、レジデントであれビジターであれ、克蘭デーロが特定の方向に経験を水路づけるようなことは行わない。様々なビジョンや洞察、直感、感情の動き、身体的反応など、何にせよ自己観察が基本である。とはいえ、やはりその経験を自らの内に位置づける必要がある。そのため、翌日にセラピストとの面談（*sesión de integración*）が設定されている。レジデントの場合には儀礼の経験を言葉だけでなく絵で表現したり、物語や神話と重ねあわせたり、それも個人単位だったりグループ単位だったり、様々なサイコセラピー上のテクニックが用意されている（Mabit, 2007:10, Romero, 1998:1）。ただしビジターの場合は別扱いで個別面談のみである。私も火曜日に行われたダナエ氏との最初の面談の際、木曜は午後3時30分に来るように、との指示をうけていた。

昨日の経験については、父親のビジョンとメッセージ、それからこれまでお世話になってきた人たちのビジョンと自らの至らなさについての自覚や反省について話をした。さらに私自身の意識にのぼってくるかぎりでは、物心ついてから現在にいたるまで家族関係に大きな問題はなかったように思う、ともつけ加えた。彼女から明確にしておくよう言われていた目的については、日本の大学一般、それから私の所属する大学の現状について少し説明した後、「そういった仕事のことで、大学関係のことで洞察を得たいという目的をもって儀礼にのぞんだが、とりたててビジョンなり教えなりがもたらされたわけではない」ことを伝えた。

ひととおり私の話を聞き終えると、ダナエは次のような言葉を返してくれた。「アヤワスカの教えは（*enseñanzas*）続いています。けっして昨日で終わったわけではありません。ふとした時に突然の気づき、ひらめきの形で教えがもたらされます。それから夢にも気を配ること。ただし、その教えを受けとるには、精神を（*mente*）クリアにしていなくてははいけません。そのためにはアルコールは飲まないこと、唐辛子とか豚肉も避けないとだめです。脂っこい重い食べ物、ジャンクフードはだめ、ナチュラルな食べ物をとること。ヨガとかメディテーションをやるのもいい。タキワシのレジデントはコーヒーすら飲まないことになっているくらいです。そうしていれば、教えはずっと続きます。日本に帰ったら、新たな状況が生まれているでしょう。」

その後、私の方からのタキワシの治療方針など全般的な質問、それから香木を焚いたり吹き

込みをする意味あいなど、前日の儀礼に関する質問につきあっていただいた後、面談は終了となった。他の参加者がどういう経験をしているのか気になるが、セラピストには守秘義務もあろうし、レジデントに接触できないことには話にならない。お礼を申し上げ、タキワシ内の数カ所で写真を撮影させてもらった後、まだ明るいうちにタキワシをでた。

\*                     \*                     \*

ところが、私のタキワシ経験はこれで終わりではなかった。午前4時の朝帰りで極端な寝不足状態だったため、この日は夜10時半にはベッドに入った。当然のごとく寝付きはよかったのだが――

夢の中で電話が鳴っている。場所は日本なのかペルーなのか、定かではない。なじみのない部屋にひとりである。ドアがノックされる。ドアを開けると母親が立っていた。「その電話にでてはいけない」と私に告げる。高齢の母は高知県の施設に入っており、車椅子で生活しているはずだ。にもかかわらず、このことを伝えるためだけに、この部屋までやってきた。その切迫した様子に私も不安になり、その心の動揺からか、目がさめる。時計をみると横になってから1時間、11時半である。「とんでもなく生々しい夢だった、あの電話は何を表しているのだろう」などと想いをめぐらせつつ、また眠りについた。おそらくはそれから30分もたっていない頃であろう、突然「オイ！」という声が聞こえた。私の意識は覚醒した。「覚醒した」といっても、「夢からさめた」わけではない。「夢を見ていない無の状態」から、「意識のある夢の（ような）世界に入った」ということである。声だけで、何かが見えるわけではない。臭いもなければ触感もない。ただ明確に音声として聞こえてくる。「夢の中にいることを自覚しながら見る夢」のことを明晰夢（lucid dream）と呼ぶが、「夢の中にいる自覚」というより夢と現実が混然とした感覚であり、あえていえば「夢と現実のあわいにいる自覚」しかない。

その声は、私にとって重大なこと、切実なことについて「教えてやろうか？」と挑発的に呼びかけてきた。日本語である。「X（実名）の身体がどういう状態か、これからどうなるか、いつ死ぬか、教えてやろうか？」「お前の家で大事にされているネコ、いつ死ぬか、教えてやろうか？」など、家族や友人ひとりひとりの名前があげられていく。私の方でほんの少し意識を集中しさえすれば、すぐにその回答が明確なイメージとして浮かび上がってしまう。そういう感覚もともなっていた。私は意識的に気持ちを散らせ、可能なかぎり回答に近づくことを避けた。「日本に大きな地震がいつ起こるか、教えてやろうか？」「お前が買ったアパートは大丈夫だ、多少ヒビは入ったりするけどな」「大学はまあ大丈夫だ」「（タキワシの心理セラピスト）Gはいい奴だ、お前を嫌ってはいない」「お前の学生たちもいい奴らじゃないか」「同僚もな」「ただし、酒を飲んだら・・・」などと、矢継ぎ早に言葉を投げかけてくる。私は心の中で懇願した。「やめてくれ、頼むから寝かせてくれ、悪いけど寝たい、昨日も今日もあまり寝てないんだ」すると「まあな、それはわかる」と反応があり、私への語りかけはなくなった。

しかし、それはつかの間の中断にすぎず、すぐに「オイ！」という声で再び起こされた。あとは同じことの繰り返しである。メッセージ伝達の挑発と強要、私の拒否と懇願、その後のわずかな眠り。そして「オイ！」による覚醒。起こされるのが3度目、4度目あたりになると、この「夢と現実のあわいの世界」から逃避するため、ベッドから上半身を起こしてみたり、椅

子に座ってみたりもした。椅子そのものにせよ、腰かけている私の身体にせよ、物理的な実在としての手応えを感じる。イメージではない。完全に現実の世界である。それでも「夢からさめて我に返った」感覚はない。「あわいの世界」とのつながりが濃厚に感じられる。切れていない。あれは「夢の中の出来事だったのだ」として"現実"と切り離して処理できない。混乱するばかりである。

そんなふうにして、夜明けまで試練は続いた。私自身の育ってきた環境、読書経験からして、「オイ！」の源について、何らかの意志をもつ私からは独立した外的な主体、たとえば「アヤワスカの精霊」とみなすことは難しい。そのような生命観、自然観をもつ人たちの世界を想像的に理解はしても、共有して生きてはいないからだ。やはり、というべきか「私自身の過去の経験、たとえば普段は抑圧されている、あるいは通路が開かれていない心的内容がシンボリックな形をとって意識の表面に浮かび上がってきているのではないか、『オイ』の声もそうした象徴化の産物であろう」といった解釈の方に親近感をおぼえてしまう。もっとも、そういった「経験の心理学化／精神分析化」もまたひとつの限定的な水路づけであり、そういう解釈にひきよせられること自体、自らの生き方を内省しつづける再帰的な近代的自己ならではの心の動きであろう。ただ、そうやって自分を客観視したところで気分が落ち着くわけでもない。その「近代的自己」を含めて、この世のすべては実体のない移りゆく現象にすぎない、そう「ほんとうに」達観できればいいのだろうが、その境地には遠い。ふと気がつくと、その移ろいゆく現象に執着し、実体化している自らの姿をみいだしてしまう。なによりその "私という現象<sup>17)</sup>"こそがやっかいだ。いや、そんな複雑な話ではない。そもそも、たんなる "象徴" (化の産物)だと解釈したのなら、どうして動揺しているのだろう。そんな必要なかまったくないはずだ。ということは、実はあの声に「私からは独立した外的な主体」としての実在性を認めている部分があるということか。

——声の主の解釈ゲームに筋の通った、そして感情的にも納得できる回答をみいだすことは難しかった。というより私自身の混乱や首尾一貫性のなさが浮き彫りになるばかりであった。しかしまた同時に、そのいい加減さの自覚もまた——「他者」にふれてこそ生じる自己理解の一環だとすれば——意味のないことではないようにも思う。ひとまずは現地で語られているとおりのことが起こったこと、「異文化の現実」として「アヤワスカの教え」(のようなもの)が現れたことに素直に驚いておくしかないのかもしれない。

### 【8月28日（金）タラポトを離れて】

タラポトの街をでたのは翌日である。ひととおりのスケジュールが終了した以上、もうビジターとしてタキワシを訪問することはかなわない。なにより昨夜のような目には二度とあいたくない。二日続きの寝不足で朦朧とした状態ではあったが、タラポト滞在を延長する気にはなれず、私は予定どおり空路リマを経由してペルー北部の海岸の街トルヒーリョに移動した。

「アヤワスカ儀礼が終わった後も3日間は酒を飲まないこと」「アヤワスカの教えを受け取るには酒を飲んではいけない」と指示されていたが、この日の夜、私は意識的にワインとビールを口にした。「アヤワスカの教え」から逃げたかったのである。5日ぶりに飲むアルコールは



すぐに心身にしみこみ、酔いの回りはことのほか速かった。弛緩した気分に入りつつ、この1週間のことを思い返してみる。印象的な出来事ばかりだが、その多くは想定できる範囲内のことでもあった。唯一ともいえる例外は、やはり昨夜のことだろう。

実は20年以上前、はじめてエクアドルに長期調査に入った折、アマゾン地域を越えて広く名の知られたクランデーロのもとに弟子入りしたことがある。食事制限を守り、師匠と一緒に数日に一度アヤワスカを飲み、頭頂部に吹き込みをしてもらう。しかし私には精霊との出会いにあたるビジョンは現れず、さらに吹き込みをしても、師匠の霊的な力である「"サマイ" (samai) があまり頭の中に入っていない」という理由により、数週間でお払い箱となってしまった。この話には後日談があり、帰国してまもない頃、高野山で出会った霊能力者の方から、いきなり「お前は何かやってきたな」と言われたのである。ことの顛末をお話すると、彼女は私の師匠だったクランデーロの名前を手がかりに「霊的なレベルで会話を交わした」後、私の潜在的な霊能力を高く評価された。その上で「おまえは今、見えているのか？ 見えてないのなら、絶対にやめておけ。こういうことに関わるのは、危ない」とご自身の経験を交えつつ、私に忠告してくれた。実際、エクアドルでの経験からもシャーマニズムに当事者として関わることの危険性については思いあたるのがいくつかあり、高野山で忠告を受けた後、観察者としてはともあれ、この領域に深く関わるのはやめようと決めていたのである。それでいて中途半端に儀礼に参加した自分が甘かったのかもしれない。

タキワシの創立者であるジャック・マビにしても、依存症のリハビリセンターを開くアイデア／ビジョン自体、“アヤワスカの教え”として受け取っている (Mabit, 2006:3)。同じ医師であり、マビの配偶者でもあるナカザワ医師にしても、マビと同様アヤワスカの精霊から繰り返しイカロを伝えられ、抵抗したものの受け入れる他はなかったと語っている (Nakazawa, 2008)。「意志をもつ主体」として植物を捉えるようなアマゾン流の自然観、生命観をどう受け止めるか、とりわけ近代的理性の国であるフランスでスタンダードな医学教育を受けてきた彼には相当な葛藤があったようだ (Mabit, [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_ing/about\\_the\\_ikaro\\_or\\_shamanic\\_song.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_ing/about_the_ikaro_or_shamanic_song.pdf))。昨夜の「オイ！」という声は、そういうタキワシ関係者の経験に連なる可能性をもつものなのだろうか。

アルコールが入っているせいか、この数日の出来事と昔の思い出がとりとめなく交錯する。早々にワインは切り上げ、ホテルに戻って横になる。禁を破ったからには当然というべきか、例の声を聞くことはなかった。

### 【9月以降 ペルーを離れての雑感】

トラボトでタキワシに関わった時間は濃密であり、深く記憶に刻まれる1週間であった。しかし、予想できたこととはいえ、そこで知り得たことはわずかでもある。レジデントとは2種類の儀礼をとみにしただけで、その後のサイコサラーピーの様子や共同生活の実態については垣間見ることすらできなかった。またその儀礼にしても、全体の流れやクランデーロのパフォーマンス、レジデントたちの行動をいくら観察しても、彼らの内的な経験には届きようがない。もっといえば、タキワシのレジデントは約半数が外国人であり、中南米にかぎらず欧米の出身

者も混じっていた。それぞれの宗教的背景、自然観や身体観にしても相当なバリエーションがあるはずだ。アヤワスカ儀礼の受け止め方、また儀礼のなかでの経験、さらにその解釈と統合、いずれの側面においても多様性があり、相互に矛盾や軋轢、誤解が起こっていても不思議ではない。心理セラピーにしても、アヤワスカ儀礼になじんでいる地元の人たちにしてみれば、セラピーの方にこそ違和感を覚えるのかもしれない。実際にふれられた領域の狭さと推測される圧倒的な多様性・多面性を前にして、私にできることはささやかな体験記述でしかなかった。

ただ、タキワシのHPには「社会・文化的な違いや言語的な違いがあるにもかかわらず、外国人患者たちの治療に対する反応は現地の人たちと大差はない (similar)」(<http://www.takiwasi.com/esp/qs02.php>) とある。マビも文化的枠組の違いからシンボリックなビジョンの解釈や統合に困難を感じる患者が多い、だからこそ変性意識の経験を積んだセラピストが必要になるのだと述べている (Mabit, 2014:4)。発表されている論考から判断すると、彼の意識観に大きな影響を与えているのはユング心理学、さらにその流れをくむトランスパーソナル心理学かと思われる。表面的には文化差や個人差がみられるとしても、意識の深層にあるものは共通だ——HPにせよマビの発言にせよ、そのような見方にもとづくものだろう。そのかぎりでは理解はできる。しかし、たとえばそこで "精霊" という存在はどう位置づけられているのだろうか。

アマゾン上流域の先住民社会では、精霊の存在は所与の現実である。私自身のエクアドルでの見聞をあらためて確認するなら、見習いシャーマンは「幻覚剤のヴィジョンの中で、最初はその登場を待ち、『見るだけ』であったのが、次第にそのような存在とのコミュニケーションが可能となり、最終的には自らの『使い霊』として、自由に呼び出し、コントロールさえできるようになっていく。当初アイデンティティが曖昧だった精霊も徐々に明確な個性をもつ存在に変わっていき、一方見習いシャーマンの方も精霊との交信を繰り返す中で自らの精神世界を鍛えあげていく」(山本, 1999:106) スタイルである。視覚的な「イメージ」としてはじまり、「実在」として手応えを感じるようになっていくプロセスがある。そしてそれを支える自然観、生命観、大きくいえば存在論が背景にある。ユングであれ何であれ、そこには精霊を当人の心理的な構築物、あるいは投影の産物とみなすようなセラピー的解釈は入る余地がないはずだ。

マビやナカザワ医師は精霊の教えを受け入れる際の葛藤を語ってはいるが、最終的にどう折り合いをつけているのかはよくわからない。ましてや千差万別であろうレジデントたちについては、もっとわからない。タキワシについて書かれた資料にあたっても、そのへんは整理されていない印象を受ける。どちらかというタキワシ内部のスタッフは心理学的な枠組や解釈に傾き、外部研究者はアヤワスカなど各種の精霊やキリスト教の聖人、悪魔などをめぐるビジョンや経験を強調しがちである。しかし、両者とも欧米出自のサイコセラピーと精霊の舞うアマゾンの存在論との折り合いについては、ブラックボックスのままである。

現象面だけに注目すれば、周辺の観光化されたアヤワスカ儀礼の現場でも「心理学的プロセスが精霊の用語を使って解釈されたり、精霊が心理学的イデオムを通じて解釈されたり」(Labate, 2014:186) することがあるようだ。タキワシの内外で似たような現象が並行しているのは興味深い。さりとて簡単に両者を結びつけるわけにもいかないだろう。レジデントをはじめ関係者との人格的な交流をもった上でなければ、推測のしようもないことである。

もうひとつ、確認もかねて気のついたことを付け加えておきたい。タキワシのアヤワスカ儀礼は、説明の内容まで含めて、私がこれまでふれてきたものから大きく逸脱するものではなかった。ただ、タキワシの場合はいかにも「儀礼らしい」厳肅さが漂っており、食事制限の徹底ぶりなども相まって、伝統へのこだわりのようなものが感じられた。その点はこの数年、プカルパやイキトス周辺でふれたアヤワスカ儀礼でも感じたことである。そこでは欧米からの旅行者がイメージする「伝統」によりそうように、シビボなど現地の先住民的な文化要素が強調され、(欧米からの旅行者にとっての) 日常から分離された特別な時空間が演出されていた。人類学ではアヤワスカ儀礼の再伝統化、高度伝統化 (re-traditionalization/hyper-traditionalization) として概念化され、具体的な報告もされてきている現象である<sup>18)</sup> (op.cit., Fotiou, 2014)。もっとも、儀礼を儀礼たらしめる「作法の厳密な遵守」「ピンとはりつめた空気」、別の表現を使うなら「ただならなさ」のようなものは、タキワシでの儀礼の方により濃厚なものがあつた。

一方、かつて長期調査の対象にしていたエクアドルのアマゾン先住民カネロス・キチュアでは、アヤワスカ儀礼はもっとカジュアルなものであつた。シャーマンは治療をはじめる前に患者やその家族に対し雑談まじりに心身の状態を尋ね、自ら吹き込みを施したアヤワスカを飲んだ後、再び話にもどる。結界をはるようなことは行わない。格好はTシャツなど普段着のままだし、大祭の時にかぶる鳥の頭飾りなども登場しない。30分ほどしてアヤワスカの効果がでてきた頃に話を切り上げ、おもむろに口笛と治療歌をはじめる(「イカロ」ではなく"taquina"と呼ばれる)。それが儀礼の開始である。数メートル離れてシャーマンの友人や親族が冗談を言い合って笑っていたりしても、さほど意に介する様子はない。周囲の人たちも歌が始まったからといって口をつぐむわけではない。「特別に設定された時空間」といったニュアンスは薄く、ごく当たり前の日常生活の一コマという風情であつた。また夜になってから助けを求めてやってくる村人だっている。野ブタの肉を唐辛子ソースにつけて食べた後であっても、急患であればアヤワスカを飲んで対応せざるをえない時もある。ふだんアヤワスカを飲んで吐くことのないシャーマンも、そうした時には激しく嘔吐する。そういった食事制限を守らない／守れない姿に接した時にこそ、シャーマンに対する好ましい気持ちが湧いてきたものである。

もちろん、タキワシが儀礼の形式にこだわるのは欧米人の美意識にかなう「アマゾンの伝統」イメージに合致させるためではない。マーケティングではなく治療に役立てるためである。少し丁寧にマビの考え方を紹介すると、彼にとって変性意識はそれ自体自然なもの、心の健康のために必要なものであり、変性意識のもとで「現実を見る新たなスタイルを獲得しようという欲求、あるいは現実の別の側面を見ようという欲求はまったく正当なことで、人間としてそれなしにはすませられないもの (Mabit, 2007:3)」だという認識がある。ところが、変性意識をもたらす物質を摂取すること自体が犯罪化されてしまうと、どうしても「コントロールされたセッティングの外、無秩序な環境のもとで使われることになり、混乱した、非生産的な経験につながりがち (Mabit, 2006:5)」になる。「準備や先導者、適切な議論や方向付け、統合のためのツールを欠いているために (Mabit, 2007:3)」本来的には健全な試みが「プロメテウスの冒険に姿を変えてしまうのである (op.cit.)」。その意味で、マビは薬物依存症を「野放図な自己イニシエーション (wild selfinitiation) の結果 (op.cit.)」だと位置づける。したがって、その

治療にしてもスタンダードな社会規範に患者を適応させようとするのではなく（その社会規範こそが当人を依存症に追い込んだ原因そのものかもしれないのだから）、スピリチュアルな成長を通じて、自らの人生に対する責任をとる形で薬物と縁を切る方向をめざしている（Mabit, 2006:4）。変性意識に潜在する危険性に留意しつつも、単純に抑圧するのではなく「安全で意義のある、建設的な変性意識の探求を可能にする」（op.cit., :6）、依存症に向かわない方法を知ることが重要だというのである。

そのためには、儀礼というコントロールされたセッティングがどうしても必要になる。儀礼という形式のもとらす自己抑制や水路づけを欠いてしまうと、コントロール不能のカタルシスや錯乱、精神病的な傾向を生じさせてしまいかねない（Mabit, 2012:7）。変性意識を暴走させないための仕掛け、安全装置にあたるものが儀礼であり、その儀礼により（精神分析という超自我からの造語であろう）「超秩序」（super-orden）がもたらされると述べる（op.cit.）。

変性意識に対してナイーブな日本のような社会では相当に先鋭的な議論に映るかもしれない。しかしペルーや欧米の状況にあてはめるなら、ひとつの一貫した立場として理解はできるだろう<sup>19)</sup>。こうしたマビの考え方を確認すれば、先住民社会よりもタキワシにおいてこそ、より厳粛な「儀礼らしい儀礼」が展開されているのは筋の通った話であり、また一見したところでは共通した面のある観光化されたアヤワスカ儀礼との背景の違いも見えてくる。9ヶ月から12ヶ月の治療を終えた患者の治療成功率が68%という高い数字も（Mabit, 2012:3）、こうした儀礼という方法論の重視と重ねあわせて受け止めるべきであろう。

\*                     \*                     \*

レジデントの経験に代表されるタキワシの内側の話にせよ、観光化されたアヤワスカ儀礼など外側との関係にせよ、旅行者として通過しただけの私には実態に即して語ることはできない。観光化されたアヤワスカ儀礼ではあっても、その中で真摯な実践を重ねているクランデーロもいるだろうし、医療目的であれ何であれ、マビのように欧米に出自をもつ人間がクランデーロとしてふるまえば（"white shamanism"）、先住民文化への敬意にもとづく行為であったとしても、周囲からは「文化の収奪」とみなされる可能性だってある。旅行者の美意識にそぐわない文化要素が消えていくように、医療目的に非関与的とみなされた文化要素が選択的に排除されることで「全体性の喪失」が嘆かれる状況もでてくるかもしれない（「無敵ではあるが "礼" を欠いた武道家」をイメージすればよい）。あるいは具体的な実践と多様な言説が交錯するなかから、クリエイティブ・コモンズのような「人類共通のスピリチュアル資源へのアクセス」として議論が収束することもあるだろう。私自身はタキワシの実践に共感するものの、そこは様々な見方があるろうし、これからどうなるのか予測も難しい。とりあえずは個人的な経験を通じてタキワシという興味深い施設の存在を示し、アヤワスカをめぐるコンテキストの広がりを確認しただけでよしとするしかないように思う——アヤワスカの教え／精霊よりもバックスの神を選択してしまったことは、後ろめたくもあり、そして心残りでもあるけれど。



【註】

- 1) 現代医学の枠内でも、ヘロイン依存症患者に対して管理された形でメタドンを処方するような薬物代替療法 (Drug Substitution Treatment) は存在するが、以下の記述に示されるようにタキワシの実践はその種のものとは根本的に異なっている。
- 2) 「シャーマン」という表現には自らの属する共同体に支えられ、同時にその共同体を支えているというニュアンスが感じられる。タキワシの外でも（とりわけ観光化されたシャーマニズムにおいては）そのニュアンスは希薄化して個人の治療に焦点化しつつあることをふまえ、以下では自称としても他称としても現地で最も使用頻度の高い「クランデーロ」(curandero = 治療師) の表記を基本とする。
- 3) アヤワスカの急性・慢性中毒への懸念もあるかもしれないが、マビによれば儀礼時における通常の使用量は薬理学でいう半数致死量（ある物質を実験動物に投与した場合、その半数が死に至る量）の50分の1以下であるらしい (Mabit, 2014:2)。アルコールの通常の使用量を想起すると——日本酒換算で1～2合だとすると、その50倍以上を摂取すれば5～10升以上になってしまう——少なくとも急性中毒の観点からするならば、タキワシでのアヤワスカはアルコールよりも安全な薬物だといえそうだ。慢性中毒については疫学的な統計データすら存在しない（と思われる）状態なので、明確なことは言いがたい。エピソード的な印象論でしかないが、少なくとも現地ではクランデーロは概して健康で長命だと語られており、実際70代後半を過ぎても現役を続けている場合も珍しくない（そのような壮健なタイプの人物がクランデーロになっている可能性はある）。さらにいえば、アヤワスカを30～40年、場合により50年以上飲み続け、同時に周囲から畏敬の念を抱かれている長老クランデーロを前にすると、その長期使用にともなう弊害を取り沙汰するのはどこか無粋なふるまいにもみえてくる。仮に少々弊害があったとしても、それを越える周囲への貢献があり、当人もそういう生き方に満足しているとすれば、何をか言わんやである。

長期使用にともなう心理的な影響については、コントロールされた対照実験の結果が2012年に発表されている。それによると「宗教的コンテクストのもとで」「15年以上にわたって月2回以上」アヤワスカを使ってきた127人は、アヤワスカ非使用者のコントロールグループ115人との比較において、精神病理的な指標でも神経心理学的 (neuropsicológicas) 検査でも結果はむしろ上回っており、結論として「心理学的な失調 (desajuste)、精神的健康の悪化、あるいは認知的な変化についての証拠はみいだせなかった」とのことである (Bousso, 2012:341)。ただ、すでに2000年代以降の心理学系の研究において、儀礼的、実験的なコンテクストならDMTやシロサイピンといった幻覚剤は心身に無視できないセラピー効果をもたらすことが示されてきている (Barbosa et.al., 2005, Barbosa et.al., 2009, Dobkin de Rios et.al., 2005, Riba et.al., 2005)。その意味では目新しい知見ではない。

つまるところ、アヤワスカに関する健康上の懸念については、少なくとも儀礼的なコンテクストで使用されるかぎりにおいて、「身体医学的・精神医学的な観点からして決定的な問題点は見つかっていない」のが現状である。

- 4) 「タキワシ」をキーワードにして日本語論文の検索サイトCiNii、記事データベースの「聞蔵Ⅱビジュアル」、知識検索サイトの「ジャパンナレッジLib」で検索してみたが、いずれもヒット数は「0」であった。「タキワシ 論文」のキーワードでグーグル検索にかけても結果は同様である。ただしキーワードを「タキワシ」だけにすると176件がヒットした。上位にあがっていたのは日本人バックパッカーのアヤワスカ体験談である (2016年1月31日～2月1日)。ただし私自身の記述も旅行記の枠を越えるものではないので、ここでは176件という数の少なさを強調しておいた方がよいのかもしれない。
- 5) 英語圏では通常ASCと略記される (Altered States of Consciousness)。その一般的な特徴としては、思考や感情表現、身体イメージ、知覚、時間感覚の変化、自己コントロールの喪失、意味や意義の領域における変化、被暗示性の昂進などがあげられる (Ludwig, 1972, 山本, 1999)。変性意識 / ASCは幻覚剤

など使わなくても瞑想なり断食なりパーカッション演奏なり様々な方法で導入できるし、圧倒的な自然や芸術作品に接した時、身近な人の生死に関わる局面に直面した際など、自然発生的にも生じる。その点では人間の経験として特別なものではない。抽象度を上げて解釈するなら、こういった状態は「日常生活における現実感覚の放棄」につながり、それは同時に「別の現実の創造に向かう条件」(斉藤, 1991:69)だと位置づけることも可能である。

- 6) 当然のことではあろうが、抗うつ剤を処方されていたり解離性の精神病をもつ人、糖尿病や尿毒症などの代謝系や心臓循環器系に問題のある人、狼瘡や多発性硬化症など退行性の疾患、高血圧、てんかんをもつ人などはタキワシの医師 (director médico) によるスクリーニングで不適格となる。またアヤワスカには強い催吐性があり、さらにアヤワスカ儀礼の前に実施される浄化儀礼でも吐くことが前提になっているため、食道に傷があったり消化器系に損傷があると嘔吐の際にそれが悪化して出血する恐れがある。その意味で胃潰瘍や食道静脈拡張などの場合も儀礼への参加は許可されない (Mabit, 2007:8-9, 2012)。心理的な側面についてはセラピストが申請書や面談をもとに判断する。
- 7) こうした食事制限は自然科学的な意味あいにおいても根拠をもつ。アヤワスカにはハルミンやハルマリンなど、ベータ・カルボリンと総称される化学物質が含まれるため、それらと相互作用しかねない成分を含む食物は禁忌にあたるからだ。より詳しくは山本 (2012:294) や (Dobkin de Rios et al., 2008:7-8) などを参照されたい。ちなみに、アヤワスカ儀礼に参加する旅行者が集まるイキトス市内には、食事制限中の儀礼参加者向けに特別メニューを提供しているレストランまで存在する (2013年8月に訪問)。
- 8) 最低賃金が月750ソル (2015年当時) のペルーの物価水準からすると (<http://tradingeconomics.jp/peru/minimum-wages>) かなりの金額だが、40名ほどのスタッフを抱えて運営していくことを考えると、妥当といえる価格設定かもしれない。2年前、イキトスで聞いた (個人営業の?) アヤワスカ儀礼の料金も150ソルだった。おしのびでやってくるハリウッド・セレブやシリコンバレーの成功者など、特別なクライアントを対象にした「貸切儀礼」"private ceremonies" になると、その料金は5000ドル (!) にもおよぶという (Beatriz, 2014: 202)。
- 9) なお、註6で紹介したとおりアヤワスカ自体も強烈な催吐性を持ち、また下剤としての側面もあわせもつが、マビによればそういった性質は「副作用」というより「本質的、カタルシス的、治癒的機能」(an essential, cathartic, curative function) を示すものであって、アヤワスカへの関心を身体全体の浄化から切り離し、ビジョンをもたらす効果に焦点化してしまうのは西洋的アプローチの特性だと指摘している (Mabit, 2007:6)。
- 10) 名前の表記については、タキワシにおける実践をもとに自ら文章を積極的に発表している人物は実名とし、それ以外の方々についてはイニシャルのみの表記を基本とした。例外はこのダナエ・サエンズ氏 (Danae Saenz) だが、実は彼女はアヤワスカをめぐる近年の世界の動きを体現したような人物であり、アヤワスカ関連の国際シンポジウムなど公的な場にも登場していることを勘案し、実名とした。

彼女の名前は広く知られているが、そのきっかけとなった事情を簡単に紹介しておくと、まず2009年、ギリシャ系チリ人である彼女はチリのサンチャゴでアヤワスカ儀礼を行っていたところ、パートナーのクランデーロと一緒に逮捕されてしまう。「マント・ワシ」(Manto Wasi) という代替医療を実践していた施設でのことである。参加者に「麻薬を使用させていた」(drogaba) というのが逮捕理由だったが、裁判ではタキワシのマビをはじめ医学、神経科学、人類学などチリ国外からやってきた専門家たちが証言台に立ち、その証言を受けて最終的に彼女らの行為は「多くの人々に大いなる恩恵をもたらしてきた」ことが司法の場で認められた。この2013年3月の判決以来、チリではアヤワスカの儀礼的使用は法的な正当性が与えられている (San José et al., 2013:180-182)。裁判のプロセスにせよ結果にせよ、アヤワスカに関心をもつ者の間でグローバルに情報が流通し、共有もされた話である。なお、

アヤワスカに関する20世紀末から2000年代の世界的な法的規制の動向については、山本(2012)を参照。近年は国連などから新たな動きもでてきているが、そのあたりについてはまた別の機会に論じてみたい。

- 11) 白い服が求められるのは、暗闇でもお互いを認識しやすいという現実的な理由の他に、ネガティブな精霊やエネルギーを避けるためというシンボリックな意味づけも関係しているようだ(Håland, 2014:32)。
- 12) 多様な精霊の存在を所与のものとするアマゾン的伝統からすると、キリスト教の聖人がその精霊のひとつになっていても、それほど驚くようなことでもない。しかし一神教たるキリスト教の世界観からするならば、アヤワスカなど様々な精霊を認めるわけにはいかないはずである。その意味では、ここでいう「融通無碍」な「アマゾン的伝統」は現地のキリスト教関係者に対してこそ強調しておくべきかもしれない。

歴史を俯瞰する形で付け加えると、齟齬を生じてしかるべき要素が統合されることなく共存してきたのは、ポルトガル人、スペイン人がアマゾンの地に足を踏み入れた16世紀から続いてきた現象でもある(ヴィヴェイロス・デ・カストロ, 2015)。
- 13) シャカパに使われる植物としては、イキトスやプカルパの先住民・メスティソの間ではイネ科の *Pariana* sp. が使用されてきたようだが(Luna, 1986: 145)、タキワシのそれについて明確なことはわからない。
- 14) この節で示されるアヤワスカ儀礼に関するタキワシの方法論とその解釈については、とくに断りがないうかがざり、翌日に行われたダナエ氏との面談で得た情報にもとづいている。
- 15) 手垢がつきすぎた用語なので「エネルギー」という表現を使う気にはなれないが、「精妙な相互交換」については私自身思い当たることがそれなりにある。かつてエクアドル・アマゾンで非常に深い変性意識に入っていた折、声をださなくても意志が理解しあえる気がしたり(そういう状態になっていることを、声にだして互いに確認した)、事後になされた言葉による描写で確認するかぎり、同じ幻覚を共有していたとしか言いようのない事態にも遭遇した。もちろん、完全に主観的な体験としての話であり、録音なり録画なりをしていたわけではない。ただ、そのくらい深いレベルで共鳴／シンクロ／交感(correspondance)していれば、相手の身体の状態が伝わったり、吹き込みとか手でさすとか(手当?)、軽く身体にふれる行為が相手の心身に大きな影響を与えたりしても、それほど不思議なことではないようにもみえてくる。
- 16) 関心があれば、山本(1999)を参照していただければ幸いである。なお、私自身の体験の全体像とその解釈はこの論考で、また観光化・商品化されたアヤワスカ儀礼における旅行者の体験については山本(2012)で紹介、考察している。
- 17) この表現は文芸評論家の三浦雅士氏により作品名として使用されている(冬樹社, 1981年)。ある年齢以上の読書人の間ではよく知られた表現であろう。
- 18) よく指摘される単純かつ典型的な例をあげれば、普段のTシャツに短パンから民族衣装にあたる貫頭衣に着替え、鳥の羽根をあしらった頭飾りをかぶり、イカロの歌詞からは聖母マリアやキリストに関する部分を削除し、スペイン語の用語はケチュア語など先住民の言語に差し替えるといったことだ(Labate, 2014:187)。ただし、この註にあげた事例はタキワシの実践とは重ならない。
- 19) 山本(2012)、とりわけp.305～306を参照されたい。

#### 【参考資料】

Álvaro, Cárcamo Saldaña Álvaro & Obreque Guirrimán Mónica. 2008 "Aproximaciones Antropológicas al Modelo Terapéutico del Centro Takiwasi." <http://www.takiwasi.com/docs/publicaciones/pa011-2.pdf>

- Barbosa, Paulo Cesar Ribeiro; Giglio, Joel Sales; Dalgarrondo, Paulo, 2005 "Altered States of Consciousness and Short-Term Psychological After-Effects Induced by the First Time Ritual Use of Ayahuasca in an Urban Context in Brazil." *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).
- Barbosa, Paulo Cesar Ribeiro; Cazorla, Irene Maurício; Giglio, Joel Sales; Strassman, Rick, 2009 "A Six-Month Prospective Evaluation of Personality Traits, Psychiatric Symptoms and Quality of Life in Ayahuasca-Naïve Subjects." *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 41 (3).
- Bouso, José Carlos, 2012 "la globalización de las plantas psicoactivas." *CULTURA Y DROGA* 17 (19)
- Bustos, Susana, 2006 "The House That Sings: The Therapeutic Use of Icaros at Takiwasi." *Shaman's Drum*, 73. [http://www.academia.edu/8691770/The\\_House\\_that\\_Sings\\_The\\_Therapeutic\\_Use\\_of\\_Icaros\\_at\\_Takiwasi](http://www.academia.edu/8691770/The_House_that_Sings_The_Therapeutic_Use_of_Icaros_at_Takiwasi)
- Dobkin de Rios, Marlene; Grob, Charles S.; Lopez, Enrique; da Silveira, Dartiu Xavier; Alonso, Luisa K. ; Doering-Silveira, Evelyn, 2005 "Ayahuasca in Adolescence: Qualitative Results." *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).
- Dobkin de Rios, Marlene, and Róger Rumrill, 2008 *A Hallucinogenic Tea, Laced with Controversy: Ayahuasca in the Amazon and the United States*. Westport, Conn: Praeger.
- Fotiou, Evgenia, 2014 "On the Uneasiness of Tourism." *Ayahuasca Shamanism in the Amazon and Beyond*. Beatriz Caiuby Labate & Clancy Cavnar Eds. Oxford University Press.
- Håland, Roger 2014 "Healing With Plants and Spirits – A phenomenological and Ontological Perspective of the Treatment Practice of Patients and Visitors in Takiwasi, Peru." (Master thesis, University of Oslo)
- Labate, Beatriz Caiuby, 2014 "The Internationalization of Peruvian Vegetalismo." *Ayahuasca Shamanism in the Amazon and Beyond*. Beatriz Caiuby Labate & Clancy Cavnar Eds. Oxford University Press.
- Ludwig, Arnold, 1972 "Altered States of Consciousness." *Altered States of Consciousness*. Charles Tart Ed., Anchor Books.
- Luna, Luis Eduardo, 1986 *Vegetalismo - Shamanism Among the Mestizo Population of the Peruvian Amazon*. (Doctoral dissertation at the University of Stockholm) <https://ja.scribd.com/doc/26541421/Vegetalismo-Shamanism-Among-the-Mestizo-Population-of-the-Peruvian-Amazon>
- Mabit, Jacques, Inedit., "The 'Icaro' or Shamanic song." [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_ing/about\\_the\\_ikaro\\_or\\_shamanic\\_song.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_ing/about_the_ikaro_or_shamanic_song.pdf)
- Mabit, Jacques, José Campos, Julio Arce, 1992 "Consideraciones Acerca del Brebaje Ayahuasca y Perspectivas Terapéuticas." [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_esp/consideraciones\\_acerca\\_del\\_brebaje\\_a\\_yahuasca.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_esp/consideraciones_acerca_del_brebaje_a_yahuasca.pdf)
- Mabit, Jacques, 2006 "The evolution of a pilot program utilizing ayahuasca in the treatment of drug addictions." [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_ing/evolution\\_of\\_pilot\\_program\\_utilizing\\_ayahuasca.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_ing/evolution_of_pilot_program_utilizing_ayahuasca.pdf)
- Mabit, Jacques, 2007 "Ayahuasca in the treatment of Addictions." [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_ing/ayahuasca\\_in\\_treatment\\_addictions.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_ing/ayahuasca_in_treatment_addictions.pdf) (Published in the book *Psychedelic Medicine (Vol. 2): New Evidence for Hallucinogenic Substances as Treatments*)
- Mabit, Jacques, 2012 "Ayahuasca Y Su Papel De Facilitador En Psicoterapia." <http://takiwasi.com/esp/p-esp28.php>
- Mabit, Jacques, 2014 "Ayahuasca: Toxicity and Limitations on its Use." [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_ing/pubing01.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_ing/pubing01.pdf)
- Nakazawa, Rosa Giove, 2008 "MADRE AYAHUASCA," <https://takiwasi.wordpress.com/2008/03/08/11-rosa-giove-madre-ayahuasca-1/>
- Riba, Jordi; Barbanoj, Manel J., 2005 "Bringing Ayahuasca to the Clinical Research Laboratory." *Journal of Psychoactive Drugs*, Vol. 37 (2).
- Romero, Jaime Torres, 1998 "Acerca de la Planta Maestra: Vehículo de Introspección." *Memorias del Segundo Foro*



- Internacional Sobre Espiritualidad Indígena*. [http://www.takiwasi.com/docs/arti\\_esp/ac\\_erca\\_planta\\_maestra.pdf](http://www.takiwasi.com/docs/arti_esp/ac_erca_planta_maestra.pdf)  
San José, Alfredo Iturriaga & Ronald Rivera Cachique, 2013 *AYAHUASCA de la selva su espíritu*. Graph Ediciones.
- Stuveback, Christoffer, 2015 "From Demonic Agency to Divine Presence: A Study of Human-Entity Relations at an Ayahuasca Treatment Centre." (Master's thesis, Lund University)  
<http://www.takiwasi.com/>
- ・エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ『インディオの気まぐれな魂』水声社、2015年。
  - ・斉藤稔正「最近の変性意識状態研究の諸相」『催眠学研究』第36巻、第2号、1991年。
  - ・山本誠「眩暈の時－知覚の変容と意味の喪失」叢書「身体と文化」第1巻『技術としての身体』（野村雅一・市川雅編）大修館書店、1999年。
  - ・山本誠「ペルーアマゾン、アヤワスカツアーをめぐって－観光化、商品化されるシャーマニズム」『四天王寺大学紀要』第54号、2012年。
  - ・「ペルー 最低賃金」<http://tradingeconomics.jp/peru/minimum-wages>

